

聖書:ルカの福音書21章1～9節

説教:石が崩される日

はじめに

初めて教会に行き戸惑ったことのひとつが、献金のことではなかったでしょうか。また救われてからも献金のことや悩みや種というかたもいるかもしれない。そんなときに、持っているものをすべて献金箱に入れた貧しいやもめをイエスが高く評価しているのを見ると複雑です。イエスはたくさん献金をした者を祝福すると言っているのか。いろいろな疑問が湧いていきます。イエスはいったい何を語ろうとしたのか。ご一緒に考えてまいります。

## 1 献金

### 1) 生きる手立てのすべて

1節から4節を読みます。「イエスは目を上げて、金持ちたちが献金箱に献金を投げ入れているのを見ておられた。そして、ある貧しいやもめが、そこにレプタ銅貨を二枚投げ入れるのを見て、こう言われた。『まことに、あなたがたに言います。この貧しいやもめは、だれよりも多くを投げ入れましたあの人たちはみな、あり余る中から献金として投げ入れたのに、この人は乏しい中から、持っていた生きる手立てのすべてを投げ入れたのですから。』」

レプタ二枚は今の価値から言えばせいぜい数百円です。それだけが生きる手立て。それを全部投げ入れた。どうしてやもめがそういうことをしたのか。どうにでもなれというようなやけを起こしたのでしょうか。あるいはこんなふうにならば、神さまがあわれんで十倍百倍にして返してくれると思ったのか。なにも書いていないのは、おそらくそのことが重要なことではないということなのでしょう。

### 2) 自分で決めて、喜んでささげる

この献金のことですが、お金が関わってきますからいろいろ心を騒がせることがある。ほかの人の献金額が気になったり、私はこれしか献金できなくて恥ずかしい。そんなふうに着かぬことがある。なかには献金がいやなので教会に行かないと言った方もいるそうです。一体献金とは何か。ちょうど良い機会なので確認しておきたいと思えます。

まず献金する額について。いったいいくら献金するのが良いのか。創世記に、アブラム（アブラ

ハム）が祭司メルキゼデクにすべてのものの十分の一を与えたことが書いてあって、それ以来、献金の一つの目安となっています。十分の一と聞いて、ちょっと多すぎると思った方もいるはず。これはある教会の話ですが、教会員の給与明細を出させて牧師が献金額の指導するところもあったと聞きました。ちょっとどうかと思います。というのは、パウロはこう言っているからです。コリント人への手紙第二9章7節。「一人ひとり、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりにしなさい。神は、喜んで与える人を愛してくださるのです。」

ここに献金について二つの大切な原則がある。一つ目。一人ひとり自分が決めたとおりでよろしい。だれからも、たとえ牧師からであっても強制されることは絶対にない。二つ目。献げるときに喜びがあるかどうか。もし心に喜びがないのならそのときはやめておく。うれしくて献げたいと思ったらそのときすればよい。これが献金についての基本原則です。

### 3) どうして？

ではこの貧しいやもめはどうだったのか。確かにだれかに強いられたわけではなく、自分で心に決めて献げたようです。でも、喜んで献げたのかどうかと言われると、むしろなにか心に深い悲しみがあってやむにやまれずしたようにうかがえます。もしそうであれば献金の仕方として無理をしすぎて、問題があるという結論になるはず。ところがイエスは、このやもめのしたことを高く評価するのです。こうなるとこれはたんなる献金の話しではなく、もっと深いレベルの話をしているのではないかと考えなければなりません。それは何か。そのことはまた後で触れることにします。

## 2 宮

### 1) 美しい建物

次に5節以降を見ます。ある人たちが宮が大変美しく作られているのを見て驚いているのをご覧になったイエスはこのように言います。6節。「あなたがたが見ているこれらの物ですが、どの石も崩されずに、ほかの石の上に残ることのない日が、やって来ます。」

世の中には物事を斜めからしか見ない皮肉屋さんと呼ばれる人がいます。イエスもそんな皮肉屋さんなのではないでしょうか。「万物は流転する」ということわざにあるように、どんなものもいつか壊れる。そんなものを見て何が嬉しいのか。」もちろんイエスはそんなつもりで言ったのではない。献金の話しもそうでしたが、ここでも宮の建物のことを言いながら、実は何かもっと深いレベルの話をしているのではないか。

## 2) 崩される日が来る

とにかく、イエスのことばを聞いていた人たちもただならぬ様子を感じたのでしょう。顔を曇らせながらそれはいつ起こるのか、そのしるしはどんなものかと尋ねます。イエスはこう答える8, 9節。「惑わされないように気をつけなさい。わたしの名を名乗る者が大勢現れて、『私こそ、その者だ』とか『時は近づいた』とか言います。そんな人たちの後について行ってはいけません。戦争や暴動のことを聞いても、恐れてはいけません。まず、それらのことが必ず起こりますが、終わりはすぐには来ないからです。」

さきほどは献金の話をしていたかと思えば、宮の建物の話しになり、そうかと思ったらこんどは世の終わり、終末の話しへとめまぐるしく変わって、つながりがないように見える。いつも言いますが、聖書は綿密に計算されながら書かれている書物ですから、必ず何かの意図があつてこのように書かれているはず。それは何か、そのことを見つけていきたいと思えます。

## 3) しるし

イエスは終わりが近くなると現れる出来事についていくつかのことを挙げています。「私はイエスの生まれ変わりである」と名のる者が現れる。戦争や暴動が起きる。民族と民族が敵対する。大きな地震、飢饉、疫病が起きる。どうでしょうか。今まさに世界で起きていることが全部あてはまる。もう終わりは近いのでしょうか。そうとも言えますし、そうでないとも言える。と言うのは、イエスの名を語るにせ預言者は昔からいたし、人間はいつも戦争をしていました。地震も飢饉も疫病も常にどこかで起きていた。なにも今に始まったことではない。ですから、イエスが言うように終わりがすぐに来るわけではない。ただ一つ言えるのは、この世界が世の終わりに向かっていることだけははっきりしている。私たちはできることなら暗い未来よりも明るい未来の話を聞きたい。

子どもや孫たち大きくなった時、いまよりも住みよい世界が来るように願いたい。しかし聖書はそのような未来を約束していません。残念なことですが、この世界は終末に向かっていると言うのです。それを聞いて、私たちは絶望するかないのでしょうか。もちろんそんなはずはない。ではどこに希望を持つことができるのか。

## 3 イエス・キリスト

### 1) 宮：建物とキリストのからだ

今日の箇所では、建物の「宮」にヒントがあります。ヨハネの福音書2章19～21節にこうあったのを思い出していただきたい。「『この神殿を壊してみなさい。わたしは、三日でそれをよみがえらせる。』そこで、ユダヤ人たちは言った。『この神殿は建てるのに四十六年かかった。あなたはそれを三日でよみがえらせるのか。』しかし、イエスはご自分のからだという神殿について語られたのであった。」

イエスにとって宮、神殿はたんなる建物を指すのではなく、ご自分のからだを指す。そこを押さえると、後の話がだんだん見えてきます。人々は宮の装飾品がいかにすばらしいかと建物のことを見ていたとき、イエスは宮が崩されるのを見ていた。そこには二つの意味があります。一つは、宮が本当に崩れていくことで、実際に西暦七十年にローマ軍によって壊されてしまいます。ですから、いまエルサレムに行ってもわずかに神殿の壁の一部しか見ることができない状態です。それが「どの石も崩されずに残ることはない」という意味です。しかし先ほど触れたように、イエスはもっと深いレベルの話もしていた。

それが二つ目のこと。ヨハネの福音書のことばから、宮はイエスのからだをも指すのですから、「どの石も崩されるに残ることはない。」すなわち、イエスのからだは完全に十字架で裂かれていくことを告げていたことにもなる。

### 2) 終末：世の終わりと十字架

宮が崩されるというとき、それは建物のこととイエスのからだという二つの意味があつたのであれば、終末についても二つのことを言っていることになります。

一つ目は、実際に歴史的に起こることで、これから何年後のことかはわからないけれど、必ず終わりの時が来る。そのとき神は罪人をさばいて神の義を完全に回復する。その前に起きるしるしがこれこれである。

そして二つ目。宮が建物とイエスのからだの両方を指していたように、終末のしるしはキリストの十字架を指すことになります。二千年前も、「私こそ、その者だ」とか「時が近づいた」というにせ預言者はいっぱいいて、その代表格はイエスに言わせればまさに祭司長、律法学者たちである。彼らは聖書を振りかざしながら、神のひとり子であるイエスを十字架にかけろと叫びました。イエスは、「そんな人たちの後について行ってはいけません」と警告しましたが、残念ながら人々は祭司長たちの後についていき、一緒に「イエスを十字架につけろ」と叫んでいきました。

### 3) いのちを投げ入れた方

話しがそこで終わるなら、どこにも希望はありません。でもここから希望の話が変わっていく。今日の箇所、献金の話、宮の話、終末の話し、この三つは何のつながりもないように見えた。けれども実は全部つながっています。

1節を読みます。「イエスは目を上げて、金持ちたちが献金箱に献金を投げ入れているのを見ておられた。」ここに「投げ入れた」とあって、このあと何回も「投げ入れた」と繰り返される。何か意味がありそうです。

さきほど、建物の宮がイエスの十字架につながっていると言いました。そうしたら、やもめが生きる手立てを全部投げ入れたことも、なにかイエスのことにつながっているのではないか。だからイエスはやもめのことを高く評価した。そんなつながりがあるのではないか。

どういうことか。やはりここでもイエスはご自分のからだを考えている。あの貧しいやもめが持っていた生きる手立てをすべて献げたように、イエスも十字架でご自分のいのちを献げていく、投げ入れている。そのようにつながっている。

今日の話はぜんぶ十字架につながっている。そこを見落としてしまうから、「イエスは沢山ささげる者を祝福している」というようなとんでもない解釈になる。それは全くの間違い。それでもあえて言うなら、「神が私に恵みを与えてくださっているのがわかるので、それで喜んで献げていく。」神はどんな恵みを与えてくださっていたのか。私たちが献げなければならぬいのちを、子なるキリストが代わってくださって父なる神にご自分のいのちをささげてくださった。そのことで私たちの罪が赦される道を開いてくださいました。もしこの赦しの道がなかったなら、私たちはどんなに惨めで貧し

くて絶望しなければならなかったか。その恵みを思い起こしたいと願います。